

信通樂師



UBUD

vol. **27**



photo:Y. Hori

パリの女性は頭の上にモノをのせて運ぶ。よく見られるところではオダランの時のガボガン（果物やお菓子などで作った大きなお供え物）を器用に載せて歩く姿がある。

しかしこれだけではない。市場では様々な商品の入った籠をのせているし、工事現場（パリでは女性が働いている場合が多い）ではセメントやブロックなどの重そうなモノも運んでしまう。すごく大きくて重そうなモノでも、すごく器用に頭の上に乗せて、しかも背筋を伸ばしてスタスタと歩くのだ。今まで見た中でも特に印象に残っているのは、料理をてんこ盛りのせた卓袱台のようなテーブルを頭にのせて運んでいた姿である。

男性はあまりやらないのだが、実はこれは素晴らしい手法だと思う。やってみるとわかるが、身体を中心線で支えているためか、意外に重さを感じなくなる。また、顎を引いて背筋を伸ばすことで姿勢がすごく良くなる。モデルの歩行練習にも似ている。どおりでパリのお婆ちゃんに腰の曲った人が少ないわけだ。

というわけで、私は日本でもこのスタイルが流行ることを密かに願っているのである。

堀 祐一

Contents

● Kabar Baru Berita Lama バナナの不思議???	4	● Apa Itu? これ、なあ〜んだ?	22
● Wariga / バリの暦大解剖! 第二弾「ウク暦」	7	● Pondok Manis 私の常宿 Putra Bali Nihon	23
● Tsure-Zure / バリ島つれづれ体験記(1) ドリアンに挑戦!の巻	8	● Pesan & Kesan 旅人一声	23
● Perawatan Anak [8] 正しい出産と育児 in Bali-8	10	● Berita Terbaru その他のニュース	24
● Pin-Pin-Boh/7 インドネシア語講座 / 7	13	● Orang-orang Ubud/27 うぶんな人々 / 27	25
● Joged Pingitan バリの舞踏 / ジョゲッ ピンギタン	14	● O-Shi-Ra-Se おしらせ	26
● Bali Buku Catatan Harian/5 バリ日記 [5]	15	● Pengumuman でんごんばん	26
● C・O・L・U・M・N 旅人一声・番外編	20		

○表紙のことば○

ふだん、夢など見ない私が、
UBUDにいる間は、毎日の
ように、“ゆめ”を見ます。
希望、恐れ、心の内側が、
裸になっていく…
そんな不思議の森に感謝。



編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、MacintoshによるDTP作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方でText Dataで入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

Macintosh format または Windows format の FD (Text Data)

E-Mail :

MHC03202: 菅原 (NiftyServe)

GCB01162: 堀 (NiftyServe)

hori@potomak.com (Internet)

eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

特派員報告 バナナの不思議 ???

『バナナ』と聞いて「極通」スタッフの長老I氏は、「私が子供の頃、バナナなんて、病気や遠足のおやつの際にしか食べさせてもらえなかった。今のマスクメロンのような高級な果物だったよ」と当時を懐かしんでしまいました。終戦後生まれの団塊の世代にとっては、今でもバナナは舶来品の貴重な果物のイメージがするようです。これまでバナナはココナツと同じように木になるもので、幾度も実がなるものだと思っていました。それが最近になってどうやら間違いだったというのに気がつきました。

バナナは芭蕉科の植物で、その種類は30くらいあるといえます。木というよりは巨大な草という感じで、幹は茎と言ったほうが正しいかもしれません。ひと房に何本もの実が付きませんが、一度房を付けたバナナの茎はもう二度と実をつけません。そのかわりひとたび根付けば、同じ株から次々に新しい茎（幹）がはえてきます。バナナは苗を植えてから実がなるまでに、およそ6ヶ月の時間を要します。季節は一年中いつでも。

さて、人間の背丈より高く成長したところ、何本もの葉がのびている幹のてっぺんから、花のつぼみが表れます。つぼみがついた短い茎はほんの少し下に垂れ下がって、つぼみもななめ下を向いています。同時にその短い茎に、小

さな小さなバナナのふさが少しづつ形づくられていくわけです。ようやく実がバナナらしい形状をしはじめると、先ちょにぶらさがっていたつぼみが開きます。つぼみといってもわれわれが想像する可愛らしいものではありません。まるで巨大な九官鳥のくちばしのような形で、粉を吹いたえんじ色をしています。やがてつぼみのいちばん外側から一枚ずつ、花びらがひらきます。その大きな花びらの内側は、目が醒めるような美しい深紅の色をしています。数枚の花弁が開いた姿はエロティックかつグロテスク。でも普通は、バナナの実がおいしく、甘く実るために、つぼみがまだ小さいうちに切りとってしまうのだそうです。

バナナもココナツと同じように、さまざまな用途があります。実はもちろんのこと、幹も食べられることをご存じでしたか？ 幹は包丁で簡単にスパッと切れるほどみずみずしく、細い空洞がたくさん空いています。まだそんなに太くない幹を薄くスライスして鶏肉といっしょにカレースープで煮込んだ料理は、バリの典型的なおふくろの味。また、米ぬかとともにさっと煮て、豚のエサにもします。バナナの幹は、他にもユニークな利用方法があります。まず、グボガンとよばれるお供え物を作る時、この幹を軸にして果物やお菓子を竹串に刺し、積み上げていきます。プラのオダランの時、女の人が頭の上に乗せて運んでいる、あ

[1] バナナの木



[2] 輪切りにした茎



[3] 茎を小さく刻む



の大きくてカラフルなお供え物です。皆さんも見たことがあるでしょう？

そして、なんとワヤン・クリッにもバナナの幹は欠かせません。スクリーンの下に直径 10cm もある幹を寝かせて置き、そこに影絵人形の軸を差し込んで固定するわけです。なるほど、ですね。

次はバナナの葉。これもすぐれもので、肉や魚を包んで蒸し焼きにしたり、コメの粉をココナツ・ミルクで練ってバナナのライスといっしょに葉に包んで蒸したりと、料理やお菓子にも大活躍。それにお供えものにも利用するし、ナシ・チャンプルーをはじめあらゆる食物を、バリの人はバナナの葉で上手にくると包んでしまいます。葉が枯れると濃い焦茶色になり、紙のようにペラペラになるので、最近はこのを使ってインテリアや雑貨小物にアレンジしたものもよく見かけるようになりました。

さて、ではここでバナナの茎の部分の繊維質を利用して作る、紙の作り方をご紹介しますことにしましょう。といっても専門的なものではなく、手近にある道具を使っての素人の手作りであることをお断わりしておきます。Vol.25 の「その他のニュース」でご紹介した工藤賢司氏の個展では、バリで作られたバナナの紙を使用した作品が何点か展示されました。「バリの踊りをテーマにしたのだから」と、

工藤氏が墨の滲みに苦勞しながらバリの紙に初挑戦した作品です。

では作り方です。写真を見ながら読んでください。

- (1) バナナの木。実と花がなっているところです。
- (2) 輪切りにした茎。茎の新旧によって紙の仕上がりが違います。
- (3) 茎を小さく切り刻みます。3cm 角ほどがベストだと思いますが、好みの長さで試してみてください。
- (4) 切り刻んだ茎を茎の 2 倍ほどの水で 4～6 時間ほど煮込みます。煮込みすぎると繊維が焦げて茶色になってしまいます。早く煮込みたい場合はカセイソーダ(ソーダ・アピ)を少し加えてください。指で摘んでぬるっとしてきたら OK。
- (5) 煮込んだ物をぬめりが取れるまで水洗いすると繊維が残ります。カセイソーダを加えた場合は、直接手に触れるのは、ある程度水で流したあとでにしてください。
- (6) 繊維を叩き潰すことによって繊維に膨らみがでて絡み合い、ここではじめて紙の材料となります。繊維を叩けば叩くほどきめの細かい紙になります

[4] 煮込む



[5] 水洗い



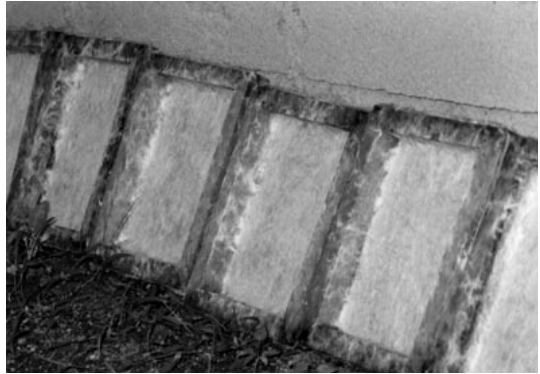
[6] 繊維を叩く



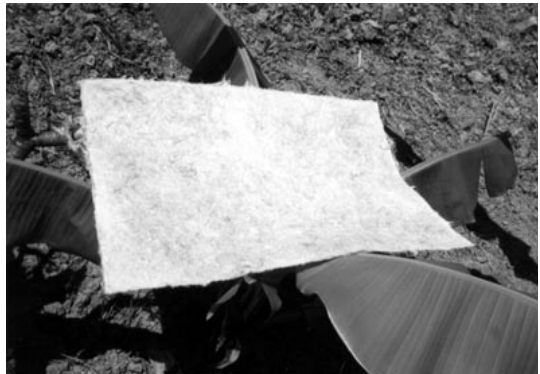
【7】紙を漉く



【8】天日で乾燥



【9】竹で作った枠



【10】バリ紙の完成

が、手作りの面白さを残したいなら、適度に繊維が残って見えるくらいの方がいいでしょう。叩き終わったら再び水洗いします。写真の石ウスとキネは、バリでツクネ状のサテを作る時に使う物を代用しました。

(7) いよいよ紙を漉きます。漉くといっても、ここではチャップチャップと手で叩いてならし、均等に馴染ませるだけの作業です。ここで使った枠は、木枠に蚊よけの網（ナイロン製）を貼ったもの。この時に模様を作ったり、他の素材、たとえばドライフラワーなどを入れるとユニークな紙ができます。

(8) 天日で乾燥させます。

(9) これは竹で作った枠です。

(10) 取り外すとバナナから作ったバリ紙が完成。

こんなに色々な使い方があるなんて、驚きですね。さらにこんな使い方も…?! こんな歌があります。♪ Lihat pohon pisang,Bila berbuah hanya sekali.Itulah cintaku …/バナナの木を見てごらんなさい、実のなるのはたった一度だけ。私の愛もそれと同じよ…♪ この歌は、何年か前にインドネシアで大ヒットしたそう。日本語にするとなんだか恥ずかしくなってしまうような歌詞ですが、バナナが一度しか実を付けないことを知ったのは、実はこの歌のおかげ。それにしても、愛の例えにまでなってしまうなんて!! 今こそ、日本のスーパーマーケットでは、安売り、山積みになっているバナナですが、実はこんなに使えるスグレモノだったのです。

たかがバナナ、されどバナナ、バナナ万歳。



バリの暦（カレンダー）大解剖！ 第二弾「ウク暦」

前号はサシーについて書きましたね。今回はウク暦のしくみに焦点を当ててみようと思います。ウク暦は学術的に言うとジャワ・バリ暦とも言われ、古代ジャワでも使われていたそうです。ウク暦は一年が210日でありなっています。解剖していくとちょっと難しくて頭が痛くなりそうですが、これこそバリ人、特にお供えものをつくる女性達にとってはたいへん重要なのです。では少しずつ説明していきましょう。

ウク暦には「週」が10種類あります。「えっ!? 週が10? 何、それ?」って思いますよね。私達が普段使っている太陽暦では、一週間に七つの曜日があります。それがウク暦では曜日がひとつだけの週、ふたつの曜日がある週、三つの曜日がある週、…と、10の曜日がある週まで、全部で10種類の「週」があり、それらが同時に進行しているのです。たくさんありますが、それぞれの「週」と曜日の名前を書き出してみましょう。

- 一曜週 = ekawara / エカワラ
1, Luang もしくは無い日もあります
- 二曜週 = duiwara / ドゥイワラ
1, Menga 2, Pepet
- 三曜週 = triwara / トゥリワラ
1, Pasah 2, Beteng (または Alang Tegeh)
3, Kajeng
- 四曜週 = caturwara / チャトゥールワラ
1, Sri 2, Laba 3, Jaya 4, Menala
- 五曜週 = pancawara / パンチャワラ
1, Umanis 2, Paing 3, Pon 4, Wage
5, Kliwon
- 六曜週 = sadwara / サドゥワラ
1, Tungleh 2, Ariang 3, Wurukung
4, Paniron 5, Was 6, Maulu
- 七曜週 = saptawara / サプタワラ
1, Redite = 日 2, Soma (または Coma) = 月
3, Anggara = 火 4, Budha = 水 5, Wrespati = 木
6, Sukra = 金 7, Saniscara = 土
- 八曜週 = astawara / アスタワラ
1, Sri 2, Indra 3, Guru 4, Yama 5, Ludra
6, Brahma 7, Kala 8, Uma
- 九曜週 = sangawara / サンガワラ
1, Dangu 2, jangur 3, Gigis 4, Nohan
5, Ogan 6, Erangan 7, Urungan 8, Tulus
9, Dadi

- 十曜週 = dasawara / ダサワラ
1, Pandita 2, Pati 3, Suka 4, Duka 5, Sri
6, Manuh 7, Manusa 8, Raja 9, Dewa
10, raksasa

これらの曜日は、ただ単純に繰り返すものばかりでなく、一年 = 210日に合わせるために同じ曜日を何日か連続させて調整する場合があります。また、一曜週、二曜週、十曜週は、ここに書いた順序どおりでなく、五曜週と七曜週の組合せによってある特定の算出法を用い、曜日を定めることになっています。

この中で、バリ人の日常生活にとって特に大切なのは、三曜週と五曜週、そして七曜週です。三曜週の Pasah (パサー) はパサールで大きな朝市が開かれる日。また、Kajeng (カジャン) と五曜週の Kliwon (クリウォン) が重なる日は15日に一度廻ってくるわけですが、この日はカジャン・クリウォンと呼ばれ、悪霊が徘徊しやすいので特別にスガンというお供えものをします。小さな子供はなるべく外出を避け、大人でも夕方早めに帰宅するようにしているそうです。

そして、五曜週の五つの曜日は方位にも関連しています。ウマニス = 東、パイン = 南 (もしくは海側)、ポン = 西、ワゲ = 北 (もしくは山側)、クリウォン = 中心、というわけです。たとえばウマニスの日だったら東の方向に行くとき、クリウォンだったら家にいるとき、と言われていています。他にも五曜週と七曜週の組合せで、クリウォン + アンガラ = アンガラ・カシー、ワゲ + プダ = プダ・チュマンという名称になり、吉日とされて通常よりたくさんのお供えものが家寺や家の敷地内のそこここに供えられます。これらは五と七の最少公倍数である35日ごとに廻ってきます。他にも吉日は山のようにありますが、満月や新月も含めて、ウク暦の吉日は rerainan (ルライナン、略してライナン) と呼ばれています。たいいていのバリのご婦人の頭の中には、これらのライナンがいつ、どのような順序で廻ってくるかがしっかり暗記されていて、いちいちカレンダーを見なくてもわかってしまうのはすごいですね。ウク暦では前述した35日単位が一月と数えられ、それが6回続いて210日 = 一年となるわけです。

さあ、今回はちょっと難しいことをたくさん書いてしまいましたが、次回もまたまたウク暦にまつわる数々の吉日をご紹介しますと思っています。お楽しみに…!



VOL. 1 TAKA-chang

バリ島つれづれ

今年の2月からUBUDで長期滞在を始めた私。本格的な滞在、というのは初めてなので、わからないこと、経験のないことがまだまだいっぱい。そんな私のおっかなびっくり初体験や、素朴なギモンをまとめてみよう、と思い立ちました。バリ島初心者、TAKA-changの『バリ島つれづれ体験記』、今後ともどうぞよろしく

●ドリアンに挑戦！の巻

“ドリアンを食べてみたい”ずっとずっとそう思い続けながらも、なかなかそのチャンスにめぐりあえなかった。そう、私はドリアン未経験。皆さんは“ドリアン”と聞いて何を思い浮かべますか？

Durian, バリ語ではDurenというその果物。Duriはインドネシア語で“棘”という意味で、その言葉どおり外見はたくさんの棘に囲まれている。数多くの果物達をおしのけて、KING OF FRUITSと讃えられ(?)同時にその独特な匂いが有名だということ。高級ホテルやレストランでは持ち込みが禁止されているという。一体、どんな匂いなんだろう。そしてその味は？日本を発つ前、軽い気持ちで「バリに行ったらドリアン食べるんだ」と公言したところ、既にドリアン経験済みの友人達は口々にこう言った。「一週間洗わずに履き続けた靴下の匂いがするんだぞ〜」「まるで腐ったぞーきんだよ」「そうよ、あれは食いもんじゃないわ」「う〇この味がするんだから」(ちょっと待った、う〇こ食べたことあるのか!?)…どれもこれも、まったく

もってヒドイ形容。なんだか怖じけづいてしまうじゃない。きっと皆、大きさに言ってるんだ、私をビビらせようという魂胆だな、と気を取りなおしたところに更に追い打ちがかけられた。出発直前、成田空港でなにげなく見たチラシにこう書いてあるではないか。“ドリアンとビールを一緒に食すと死ぬと言われてます…”なにーっ!!死ぬー!? “…実際には死に至ることはないと思いますが、かなり重体に陥る危険性があります。食べ合わせには注意しましょう…”ええっ? 重体ーっ!? ドリアンって、そんなに大げさな果物だったの!? そういえばこんな噂も聞いた。ドリアンとコーヒーを一緒に食べたところ、後でさんざんお腹が痛くなったと…。どうやらドリアンって奴は相当気難しいらしい。ちょっと機嫌を損ねると強烈なしっぺがえしがくるってとこか。うーん、わがままな奴だ。…そんなカンジで、食べる前からドリアンについてさんざん悪いイメージが植え付けられてしまったのだった。

しかし、強烈なイメージのあるものこそ気になるというもの。道端のワルンで売られているトゲトゲのごっついドリアンが、これまた強烈に私を誘惑してくるのだ。「フフフ…ボクを食べてみないかい? あ、でもそ



んな勇氣ない？」と、不敵な笑みを浮かべながら。へん！ お前なんてどうってことないもんね…いつか食べちゃうからね。(強がり) そんなある日のこと、私はUBUDの王宮のそばにあるワルンでバビ・グリーンを食べていた。その時、一緒に来ていた友人が突然何の前触れもなく、「おばちゃん、ドリアンある？」とワルンのイブに言うではないか。今、なんて言った？ そ、そんな急に、なんの心の準備も出来ていないうちに…。しかも私は今、おなかいっぱいバビ・グリーンを平らげてしまったところ。バビ・グリーンはけっこうこってりしている。私に言わせればかなり個性の強い食べ物だ。

お腹の調子も全く普通だった。(考えてみれば、食べ合わせが悪くて危険なものを、一緒に店で売るわけがないのだが…) さて、ドリアンを食べた後、気になるのはその匂いだ。「あ、ドリアン食べたね」とすぐにばれてしまうし、自分自身もしばらくはドリアンの匂いにつきまともれることになる。別にドリアンの匂いくらい…とも思うが、ドリアン嫌いの友人に、「わ、臭い！

寄るな！」と言われてしまうのは悲しい。そこで朗報。バリ在住スマトラ出身のI君によると、果実を食べたあとに残った殻に水をはって、それで口をゆすぐと匂いが消えるらしい。ついでに、果実をつかんでいた指もゆすぐといいということ。実際に試してみたところ、絶大な効果とまではいかないものの、多少の効果は感じられた。どちらにしろ、ドリアンを食べた後にその殻の水で口をゆすぐだなんて、なんだか通っほくてカッコいい。なんて思ってしまうのは、私だけ？!

それにしても、バリにはドリアン好きが多いと思う(バリに限らないけれど)。あるバリ人K君はドリアンに目がない。そのドリアン好きがこうじて、1日に5個も食べてしまったという。なんと！ まるごと5個も。ちょっと、いくら好きだからって、それは食べすぎだよ。そんなに食べて大丈夫!? …案の条、彼はその後ほどなくお腹をこわし、相当苦しい思いをしたそう。食べすぎには要注意!! ドリアンの季節は一般に雨期(12月~3月)と言われている。UBUD周辺では雨期の終わり頃になると、市場やワルンの店先にまさに威風堂々といったふうに並ぶドリアンを見ることができる。ドリアン好きにとってはさぞ待ちどろしい季節だろう。しかし、季節じゃなくとも、バリではお手軽にドリアン味が楽しめるのだ。ジャム、クッキー、アイスクリーム、そしてソフトキャンディーなどなど、スーパーマーケットに行きさえすれば簡単にドリアン風味と出会うことができる。ソフトキャンディーを食べていたところ、ドリアン好きの友人に「あーっ、ないしょでドリアン食べたな」と勘違いされてしまったほど。かなり忠実に味と匂いが再現されている。見事!! しっかしこれだけドリアン風味のものが店頭しているなんて、やはりドリアンは果物の王様として圧倒的国民支持を受けているのだ!

なにはともあれ、良くも悪くもこんなに話題性の多い果物も珍しい。私のドリアン初体験も、怯えていたわりには無事に終わらせることができ、メダシメダシ。皆さんにとってのドリアンはいかがなものですか?



体験記

ふ、と空港で読んだチラシが頭をよぎる。“食べ合わせには注意しましょう…” 確かそう書いてあったような気がする…。頭の中が真っ白になってきた…。そうこうしているうちに、4つに切られたドリアンが目の前にはこぼれてきた。トゲトゲのからのなかに、なにやらクリーム色の物体が詰まっている。おそろおそろ棘を触ってみる。痛っ、結構するどいぞ。じいーっとにらめっこしていると、またもや奴(ドリアン)が「へへっ食べられるもんなら食べてみろってんだ」と挑発してくる。ええい、なまいきな! 友人はクリーム色の物体(果実)を指でつまんで、むしゃむしゃと食べている。思い切って、私も指を突っ込んでみる。ねちよとした感覚。ひるんだらこっちの負けだ。一気に口へと持っていく。おわっ、とやたらにトロピカルな味が口中に広がった。濃厚な舌触り、甘くてまろやかで、カスタードクリームチーズって感じ。溶けたアイスクリームって感じもする。果実の真ん中には、おどろおどろしいその外観からは想像できない、つるんとした種がある。…あれ? 結構いけるじゃん。そういえばさっきから目の前にあるというのに、別に嫌な匂いもしないぞ。南の国のフルーツってかんじの甘い甘い匂い。1個、2個…と食べるうちに、想像していたよりも奴(ドリアン)がいい奴だということが分かってきた。確かにくせはあるし、大好き! とまではいかないけれど、とりあえず仲良しにはなれそう。なーんだ、良かったあ。もう奴呼ばわりはやめよう。…その後、心配していたバビ・グリーンとの食べ合わせも別にどうってことなく、

正しい出産と育児



by ムーン・ストーンの花嫁

NOMOR 8

■ Baby のうんちはチョコレートの味!?

さあよいよ家での育児が始まった。育児に関して全く予備知識がなかった私にとっては、それは驚きと、とまどいと、すさまじい疲労の毎日であった。ましてやバリの習わしにどっぷりつかった育児である。こりゃ落ち着いていられる方が難しいというものだ。

まず育児用品の不便さである。新生児のための手袋、足袋そしてグリタというシロモノについては前号で書いたが、なんといってもここでは赤ちゃんが“オムツ”というものをしないということにはびっくりした。赤ん坊はとにかくよくオシッコをする。膀胱もまだ小さいし、腎臓の機能がまだ未熟なので、ミルクを飲んでオシッコを出す。ひどいと間隔を10分も置かずにまたする。3ヶ月目くらいからは少しづつ間隔が長くなっていくらしいが、それまでは1日に20回以上ものオシッコをするのである。でオムツをしなかったらどうなるか。当然、身につけているものが全て濡れる。生後42日目のブラン・ピトゥン・ディノというウパチャラ(儀式)まで、とりあえず、赤ちゃんはパンツをはかずに、ポポという布をつける。ペラペラのガーゼや木綿でできた長方形の布にヒモがついたもので、後の腰から股をくぐり、おなかをおおったところでヒモでカンタンに結んでおくのである。それにベビー用の服を着せ、下には必ずアラッドという大きめの布一枚を敷く。寝かせておく時も、抱く時も、そのアラッドが必ず赤ちゃんの下になければならない。ひどいとこのクソ暑いところで、長ソデの服を着せられ、そのうえアラッドでぐるりと巻かれて、いかにもゆで上がりそうな赤ちゃんも時々見かける。

赤ちゃんの寝床は、小さなベビー用マットの上に厚めのビニールで出来たおねしょパッドをひき、その上にアラッドを敷いておしまい。夜はアラッドの下にもう一枚フカフカのおくるみみたいなのを敷くが、一度おしっこをするとポポ、アラッド、おくるみ全てがグショ濡れなのだ。夜中でもしょっちゅうおしっこをするから、その度にすべてを替えなければならない。昼間はそのおしっこでビタビタの、膨大な量のポポ、アラッドを庭のその辺の植木にひっか

けて自然乾燥させる。2回くらい使ったら洗う。日本のやり方ならおむつの布だけ替えて洗えばいいのに、全く不合理である。抱いている時や座って膝に乗せて抱えている時などは特にヒサンである。自分の着ているものまでおしっこで濡れてしまうのだ。これを当たり前と思っているバリ人達はいいが、私達日本人はギョエギョエである。自分でおしっこが出来る(もしくは言える)3~4歳くらいまでおむつはなし、ということは、それまでタレ流しなのである。そこでやはり書き添えておかなければならないのは、うんちの場合である。固い時はまだいい。出る前にじっとして顔を赤くしてふんばっているのでもそれと分かる。問題は下痢の時だ。ヘタをすると本人も親もしばらく気がつかず、あれよという間にBabyの寝具や、カーペットや、服、手などがうんちまみれになっている。そうなったらもはや手のつけようがないので、急いでカマル・マンディ(トイレ兼水浴び場)にBabyをつれて走るのである。それでも不思議なことに、かわいい愛しのわが子のオシッコやうんちは、さほど気にならず、固さも量も程よい優良ウンチが出た日には、妙に嬉しくて、ほれほれとそのウンチを見つめてしまうのである。時にはふとそのウンチにほおずりしたくなるほどだ。インドネシアの諺に「tai kucing rasanya coklat」というのがある。「ネコのフンもチョコレートの味」、要するにあばたもえくぼ、ということなのだが、私の場合は「自分の子供のウンチもチョコレートの味」のようになってしまった。

生後数週目、日本の親しい友人がBALIに来るといっているので、ワガママを言って日本製のおむつと、おむつカバーを頼んで持ってきてもらった。初めは「えっ?! こんな暑苦しそうなの、赤ちゃんがかわいそうじゃないの」と非難がましかった家族も、しばらくするとその合理性と機能性にすっかり感心し、親戚のお姉ちゃんまで「それ、バリで手に入らないのかしら」なんて言うようになった。お義母さんだけは、「私には付け方がよくわかんないわ」とか「昼間は暑いから取ってあげなさい」とか、最後まで静かに抵抗していたが、やがて何も言わなくなった。

ウチのBabyは今2歳になろうとしているが、まだまだ

出る前に「オシッコ」が言えず(出てから言うのはできる)、オムツを愛用している。でもやはりモコモコ暑そうなので、できるだけはずしてやっている。薄いコットンの半ズボン一枚はくだけで、それは涼しそだが、やはりおしっここの時はタレ流しである。下のカーペットやゴザまでびしょ濡れた。私はもう慣れっこだが、たまにその場に居合わせた日本人の友人は、大声を張り上げて「ギャーッ、おしっこ、おしっこしちゃったよー!!」と目をむいてびっくり仰天する。そういえばおしっこっていちおう排泄物だからなーなんて思いながらも、すぐ乾くからいいじゃん、そんな大声出さなくたって…、と思っちゃうのだ。しかしよく考えてみると自分の子のオシッコだから平気なのであって、人の子のオシッコだとけっこう気持ち悪いのかもしれない。すみません、母親って、こんなモノなのだ。

■ How to ねんね in BALI

もうひとつ、非常につらく、しんどかったのが、寝不足であった。Babyが寝不足なのではない。私が寝不足なのだ。これは子育ての経験があるお母さんしか分からない。Babyはお母さんのおなかにいる時、1～2時間のサイクルでこまめに寝たり起きたりを繰り返して、生まれてからもこの習慣がしばらく身についているのである。Babyは目覚める度にオギャーオギャーと泣くので、すぐさま抱き上げておっぱいをあげる。日本の育児書には、「お母さんも家事だの何だので忙しいでしょうから、少しくらいは放っておいてかまいません。大きな声で泣くことによって、赤ちゃんの肺も鍛えられます。」とある。アメリカはもっとすごくて、「赤ちゃんがよく泣いて困る時は？ Baby roomの扉を閉めてしましましょう。」なんて書いてある本もあるらしい。それじゃいくらなんでもカワイソウだし、バリでそんなことをしようものなら人非人のレッテルを貼られてしまう。とにかく真夜中だろうが眠かろうがここではBabyが少しでもウエーン、と泣いたらな

にをおいてもまず抱き上げてやらなくてはいけないのだ。それはお母さんだけでなく、その場に居合わせた人、もしくはいちばん近くにいる人が全速力で駆け寄ってしなければならない。それが1日に何十回とあってみなさい、いいかげんイヤになってくる。Babyにも個性があって、寝かせて放っておいても泣かずにおとなしくしている子もいるらしいが、とにかくウチの子はよく泣いた。夜中も例外ではない。とにかくおっぱいをやればおとなしく眠りにつくと思ったら大間違いで、必死にあやし、知る限りの子守唄を歌い続け、バルコニーの隅から隅へと何十往復もしながら腕がしびれるまでゆりゆりして、やっとスヤスヤ寝てくれるのである。ああ、やっと寝たわ、と思ってそろりそろりとベッドに下ろす。その寝入りばなの大切な時に、不用意に音をたてたり大きな声を出そうものならもうおしまいだ。今まで小一時間あやし続けた苦労が水のアワとなり、再びBabyは泣きだす。夜中に1～2時間ごとにこれをしていたらお母さんは全く寝る時間が無い。次の日の昼寝で挽回できればいいが、昼夜を問わずこの状態なのでもうどうしようもないのである。また時折、これは特に真夜中のことが多いのだが、どんなにあやしても、おっぱいをあげても、泣き止まないこともあった。夜中、オンギャーオンギャーの威勢のいい声が10分も響き渡ると、私は途方に暮れてしまう。夫もがんばってゆりゆりしてくれるがそれでもダメだ。あーもうカンベンしよう…とつられて泣きたくなる頃、決まってお義母さんが起きてきて助けてくれるのである。まず、部屋をノックする音。トントン、「デー、デー、ケンケン(どうしたの?)、デー？」デーというのは夫の名前の略称である。ドアを開けると、そこには髪を振り乱し(お義母さんはセミロングの天然パーマなので、いったん寝るとすごく髪が乱れる)、寝呆けまなこの半目で、その額には白いボレー(米と各種香辛料をすりつぶして作るぬり薬。これを額や足に塗って乾かすとポカポカ暖かくなる。)が乾いてこびり付いている。その姿は言っちゃ悪いが妖怪のように不気味である。そのお義母さんがドアからヌーッと現われて、Babyをとりあげ、10分もあやすと、これが不思議なことにビタリと泣き止むのである。これはもうプロだ。

Babyのあやし方で、やはり私はびっくりしたことがある。バリの人すべてがそうなのか、ウチの家族だけがそうなのか知らないが、とにかくBabyをあやすのがウマイ。それも非常に臨機応変で、あやし方のバラエティーに富んでいるのだ。時には場所を替え、庭の木陰に出て涼をとってみたり、レゴンの練習をしている妹の部屋でテープのガムランの音を聞かせたり、と、Babyを飽きさせないテクニックには脱帽である。

また、小さな赤ちゃんをあやす時はやさしくするも



のだと思ひ込んでいたら、そうではないのだ。なんと、バレ・ガンジュール（ウパチャラの行列の時に鳴らす、あのシンバルのやかましいガムラン）を「ドン チェン、ドン チェン、ドン ジャーン!!」と、口で真似ながら、激しく揺さぶるのである。特にこれはお義母さんとお義父さんの十八番で、結構しょつ中やっていた。初めはBabyがどうなることやら見ていてハラハラしたが、これも不思議なことに、泣いたり、嫌がって抵抗するでもなく、Babyはされるがままその激しい揺れに身をまかせて、結構気持ち良さそうにしているのである。そして、今まさにBabyがうとうとせんばかりになると、今度はやっと子守唄のメロディーに変わり（それでもけっこうな声量だ）、Babyのおしりや太もものあたりを手のひらでブルブル、ブルブルと小刻みに揺るのであった。普通揺すって起こす、というものなのに、彼らは揺すって眠らせるのである。そして座ってヒザの上に乗せ、さらに足を貧乏揺すりのように揺らす。するとこれまた不思議なのだが、Babyは安らかに眠りにつくのである。眠りが十分深くなったところで寢床に移し、やれやれ、というわけだ。

生後1ヵ月くらいの時に鼻カゼをひいて、デンバサールの小児科に連れていったことがあった。待合室の長イスで順番待ちをしていたら、横にズラリと同じようにお母さんのヒザに抱き抱えられて、みな同じように貧乏ゆすりや小刻みにブルブル揺すられている赤ちゃん達を見た時は笑ってしまった。車や電車に乗ると、赤ちゃんのみならず、大人の私達までも、ついうとうとしてしまう。あの程よい振動が眠気を誘うのだろうか。ヒザの上で揺るものきつと同じに違いない。これは日本のお母さん達に知られていないだろうから、是非試してみたいものだ。

■守るべきわが愛しの小さないのち

さて、オシッコとねんねのことはさておき、バリならではの育児にまつわる習わしについて少し御紹介しよう。まずパンタン（お供えもの）。Vol.25に書いたアリアリを埋めた場所、寢床の枕元、そして部屋のドアの前。しばらくこの3箇所には、毎日チャナン（花をあしらったパンタン）や、スガン（お米をあしらったパンタン）が欠かすことなく供えられる。次に赤タマネギ。これはバリでは魔よけになくてはならないものだ。以前、日本人ツーリストのある男の子が、ホームステイの部屋でいろいろ不可解なことが起こるので、あるバリ人に相談を持ちかけた。するとそのバリ人は、朝夕のマンディのあと、頭のとっぺん、額、両手、両足、そしてアソコに赤タマネギを少しずつ塗りなさい、とアドバイスしてくれた、というのである。その男の

子は早速市場で1キロもの赤タマネギを購入して、ホームステイの人に大笑いされたそうだ。ドラキュラにはにんにくだが、バリの魔物には赤タマネギなのだ。ウチのBabyも、さすがにアソコにはつけなかったが、頭のとっぺんから両肩、両手のひら、両ヒザ、両足の裏と、マンディの後には欠かさずつけることを義務づけられた。そして夜、寝る前には部屋のドアに3回、少しずつちぎって塗りつける。普通赤ちゃんというのは、ほのかな石けんの匂いと、ミルクの匂いがするものなのに、ウチの子は赤タマネギ臭かった。今でも料理の時、赤タマネギを切っていると、ほんわかとわが子が小さなBabyだった頃を思い出すことがある。

そして次はサンディ・カロ。これは何かというと、要するに「魔の刻」。ちょうど日の沈む頃がそれにあたり、この時間には部屋の中か、バルコニーのイスとかに静かに座っていなければならない。また、そのサンディ・カロの時には、「プニュンカル」をしなければならない。これは村によっていろんなやり方があるらしいが、ウチでは、枯れた椰子の葉を束にしてまとめ、先端に火をつけてタイマツのようにし、これを持って部屋のある家屋を3周回るのである。その後、部屋のドアの敷居の辺りでそのタイマツをバサバサと振る。おかげで部屋の入口のカーベットの、火の粉が落ちて無数の黒焦げができてしまった。ちなみに、このプニュンカルをするのは夫の役目だ。UBUD 辺りだと、たいまつ代わりに塩を撒いたり、台所のカマドの灰を撒いたりするそうだが、どれも意味合いは同じである。要するに魔よけなのだ。「プニュンカル」というのは壁を意味する言葉でもある。大昔から、小さな赤ん坊が病気にかかったりしないよう、せめてこういうことをして守ってあげたのだろう。バリにはそんな優しい思いの込められた習わしがたくさんある。一見すると、「何だバカバカしい」なんて思っちゃうかもしれないが、これは大変素晴らしいことなのだ。こうやって、バリでは、赤ちゃんは大切に大切に育てられていくのである。



Illust:Fumio



■不思議なこと

Baliに来てちょっと不思議な出来事/kejadian gaibに出会った、という人は多いかもしれない。体験はないけれど話には聞いたことがあるという人は、もっと多いはずだ。今回は、Baliの人々が体験した不思議な話を1冊にまとめた本『MENGENAL ALAM GAIB / 不思議な世界を知る』から、奇妙な話/cerita anehを紹介しよう。さあ電気消して、電気消して！

いまから9年前のこと、当時50歳だったGusti N.さんの体験談はこう始まる。

“Saya merasakan kaki saya mulai lemah/足が弱り始めたと感じたんだワ” 足だけじゃない、手までピリピリしびれる感じになった。そしておかしなことに、“手足の毛を抜いてみっと、ちっとも痛みを感じねえんだナ/jika saya cabut bulu tangan,tidak terasa sakit sama sekali”

そして病院/rumah sakitへ行くと、即入院/rawat nginapを命じられる。2週間目に医者から、もう治ったから退院するようにと言われたが、実際にはひとりで歩くこともできないほどひどくなっていた。

“Akhirnya saya berebat pada seorang balian/結局、あるバリアンのとこさ治療に行くことになっただヨ”

ひでえ医者もいたもんだが、こんな時こそBaliには強い味方がいる。いよいよbalianの登場だ。ここで少し説明しておかなければならないが、balianといえば、なんでもかんでもblack magic/ilmu hitamと結びつけては間違いだ。例えばbalian usadaといえば、lontar/シュロの葉に書かれた古文書にまとめられたudasa/治療法にもとづいて患者を診る治療師だし、balian manakはお産婆さんのこと。多くは、dukun/伝統的治療師に属している。

■体からヘンなものが次々と

さて、balianのもとを訪ねたGustiさんだが、果たしてどんな処方を受けたのか。

“Seluruh badan saya diurut dengan minyak/全身を油を使って指圧されたんだワ” なんのことはないオイルマッサージじゃないか、と思いきや、間もなく手足から猫の毛のように細かい毛が出てきたというのだ。なぜか毛の色は赤味をおびていた/warnanya agak kemerah-merahan. そしてさらに不思議なことがつづく。“Beberapa hari kemudian, dari celah-celah jari tangan saya keluarlah benda-benda seperti tembaga perak dan mas yang bentuknya seperti kawat/その後何日かしたらヨ、手の指の間から針金みてえなかつこの銅や銀や金みてえなモンが出てきたんだア”

すっかりおったまげてしまったGustiさんだが、治療は8ヶ月続き、その間に出るものはすべて出尽してしまった。タネぎれのドラエモンみたい。でも、手足の痛みはまだ治らないという不運。ある友人の勧めで、さらに別の治療師を訪ねた。

“Sarana yang dipakai adalah sepotong ranting kayu kelor. Kayu tersebut dipukul-pukulkan secara pelan-pelan ke seluruh badan saya/使われた道具は1本のクロールの木の枝だったよ。その木でゆっくりと全身を叩きつづけるんだナ” そして病巣というか悪い部分に当たると、凄まじい痛みを感じた/rasa sakit luar biasa そうだ。3日に一度/tiap tiga hari sekali、6ヶ月続いたこの「悪魔ばらい」的治療法で、ようやくGustiさんは健康を取り戻すことができたという。

メデタシ、メデタシ。それにしてもGustiさん、叩かれつづけて半年、妙な趣味を覚えていなければいいが。

びんびん坊からのお願い。上の“Kayu kelor”をご存知の方、教えて下さい。Kelorは辞書には「わさび」とありますが、ホントかな？





バリの舞踏

ジョゲッ・ピンギタン (JOGED PINGITAN)

ホテル・イバのオープニング・イベントで観た不思議なパワーを感じた踊り。ひとりの女性が延々と1時間30分の間、踊り続ける。興味を持ち、ホテルの従業員らしき人物に「あの踊りは何という名前ですか?」と聞くと、「あれはジョゲッ・ピンギタンという踊りで、グループはスバリ村から来た」と教えてくれた。

後日、ひょんなことからスバリ村の青年、グスティ・ヌラー君と知り合う機会があり、ジョゲッ・ピンギタンのことを聞いてみた。すると彼は、「私はそのグループの役員をしています」という。偶然とは言え、何か導きかと思ってしまう答えが返ってきた。私は決して運命論者ではないがそんな気になり、もう一度、ジョゲッ・ピンギタンを観たいと思い、さっそくチャーターすることにした。

ジョゲッ・ピンギタンは、19世紀の終わり、芸術に理解の深かったギヤニアルの王様が1883年にブラバトゥ村の芸術家たちに新しいダンスを創らせたのがそもその始まりのようである。それは名前をガンドゥルンといい、ガムランはスマル・ブグリンガンを用い、リズムはジョゲッを用いた。この踊りの形態は、レゴン・ラッサムから取り入れられ、レゴンの変形の衣装をまとったひとりの少年が観客の中からひとりの男性を選び一緒に踊るという形式のものである。しかしレゴンとは違い即興制が強く、踊り手がガムランの演奏を先導する。この時代は宮廷内の余興の意味合いの濃い踊りであったと思われる。

1884年、スカワティの村でこの形式で女性が踊る踊りが創られた。名前をガンドランガンという。ガムランはティンクレック（長さの違う手元の一部以外を半割りにした竹筒を縦に並べ、横一列に寝かして紐で吊り下げたもの）、クンダン（太鼓）とシンバル（チェーンチェン）が演奏に加わり、力強く覚えやすい魅力的なメロディを奏でる。この頃から宮廷の外でも演じられるようになり、これが今日のエロティックなジョゲッ・ブンブンの原形となった。

そして1902年、ジョゲッ・ガンドゥルンはギヤニアル地方だけでなく他の地方にも急激に流行し広まり、現在でもUBUD近辺の数ヶ所の村に残っている。

ジョゲッ・ピンギタンはこの時代、ジョゲッ・ブンブンとは違う経過で発展した。ガムランの形態は13名の演奏者によって、竹で出来た木琴形式の鍵盤楽器を用いて演奏される。音階は7音階だ。踊り手の冠に神聖な力が

宿り踊り手がトランスすることがしばしばあったことから、呪術的舞踏、神聖な踊りとして、寺院内で儀礼用として演じられるようになった。ジョゲッ・ブンブンと同じように観客から男性を選ぶが、違いは礼儀正しい振る舞いと、踊り手の能力が要求される。

SEBALI村では、この舞踏を復興しようと試みている。いよいよ第一回目のチャーターが5月14日に行なわれた。グスティ・ヌラー君との検討の結果により、美しいライステラスの中にひっそりとたたずむ古い寺院の前が会場となった。なかなか気持ちのいい空間だ。落ちゆく夕日に染まるライステラスを眺めつつ開演を待つ。夕日が椰子の木の向こうに消えていった頃、ガムランが乾いた弾んだような音色を奏で始めた。このスバリの風景と優しく溶け合っていく音色だ。聞き入るといっても、ただ鳴っている、音がそこにあるという感じだ。それくらい、自然と音が調和している。思わずボーッとしているとやがて踊り手が中央に進み出てきた。踊り手はニ・グスティ・アユ・プトゥ・コリミ（1968生）。閉じられた幕を開けていくような踊りの仕草に、これから何が始まるのだろうかとわくわくさせられる。何かに操られているように、自分の感情がないかのように、ただ黙々と踊り続けていく彼女。操られている様とはいっても、彼女の踊りには強さを感じる。内に充満するパワーみたいなものを。まるで1



本の大樹のようだ。張りつめた空気の中、そのパワーは少しずつ蒸発して、観るものを釘づけにさせていく。すっかり見入っているうちに、次々と演目が消化されていった。ガルーダに扮する踊り、1人で踊るチャロナラン…。最後に男性とペアになって踊って、約1時間半におよぶステージが終わった。1人の女の子が「今踊った人は私のお母さんの。」と嬉しそうに話しかけてきた。観客の満足そうな姿を見て、お母さんのことをさぞ誇りに思ったことだろう。12歳の彼女も今、踊りを勉強中だという。「でもジョゲッ・ピンギタンはまだできないの。」と憧れの目で母親をみつめる彼女。いつかこの子もジョゲッ・ピンギタンを踊る時が来るのだろうか。こんなふうにして、ずっとずっとバリの芸能が受け継がれていくことを心から願っている。今回のチャーターはこのようにして幕を閉じた。グスティ・ヌラー君の協力には感謝、感謝である。なお、チャーターご希望の方は『情報センター・APA』まで。

バリ日記 (5)

カブド大好き!

渡辺一郎 & 小堀桂子

4度目のバリ / その2 : 1997年4月27日~5月4日

■ 1997年5月1日

今日はバリ中西部、標高2000mにあるプラタン湖や、バリ植物園にお出かけ。現地情報センター「APA?」でブッキングした半日ツアーである。どちらかといえば、地元バリ人向けの観光地だそう。運転手はワヤンさん。実直そうな青年でなかなかよろしい。渡辺は英語カラキシだめ。ワヤンさんも日本語カラキシだめ。いまひとつ意思の疎通ができない。ま、誠実さでカバーしてくれるだろう。

出発!

ワヤンさんの運転はていねいで安心。途中の田んぼで鴨がいるのを珍しいだろう、と停車してくれる。水田に合鴨を放して、除草、攪拌、施肥などをやらせる、「合鴨農法」だ。渡辺は有機農業を推進する団体の職員であるので、合鴨農法でお米づくりをしている農家が日本にもいるよ、と答えたが、通じただろうか。

水田が広がる。日本の米どころの風景とさほど変わらない。子どものころ過ぎた仙台近郊の田んぼを思い出させる。ただ違うのは田んぼの周りにはヤシの木があること、稲の刈取・脱穀している隣では田植えをしていることか。車は山道を登っていく。暑いバリでもさすがに2000m級の地域、涼しくなってきた。霧まででてくる。もう少しでプラタン湖だ。この湖は、チャトゥール山のクレーター内にできた火口原湖。豊富な水量を持ち、バリ農業

への貴重な水源になっている、という。ま、宮城蔵王でいえばお釜(おかま)、ということね。

まず、市場に寄ってみる。市場は観光客用と地元用の二つの顔を持つ。なぜかスパイス、とくにバニラの品揃えが多い。桂子得意の、2つ買うからまけろ! 攻撃でお買い物。お台所のコヤシに、1年に2回くらいしか使わないだろうバニラを買い込む。

次に地元向け市場をブラウブラ。ここはバリでも涼しい地域なので、野菜の特産地なのだろう、人参、じゃがいも、キャベツ等の野菜が立ち並ぶ。商売柄野菜は気になっていると、ワヤンさんが両手いっぱい野菜を買い込んでいるのに遭遇す。そんなに買ってどうすんの? と聞けば、彼の本職は日本食レストラン「百屋」のスタッフだとのたまう。へー、そうだったんだ。

プラタン湖到着。ここにはウルン・ダヌ・プラタン寺院があり、湖のなかにお寺が張り出している。ま、広島宮島みたいなもんか。お寺の周りは公園となっており、なかなか渋い2ショット用の風景がふんだんにある。ここぞとばかり記念撮影をしまくっていると、そのあまりのすごさに回りの人に笑われてしまう。(一郎)

桂子がこの時撮ったプラタン寺院の写真は、霧の中にぼーっと寺院が浮かぶようで、なかなか気に入っているのだ! (桂子)

プラタン湖を後にして、近くのバリ植物園へ。ここなどは完全に地元の人のためのリゾートである。山の中腹をまるごと使った広さはなんと129ヘクタール。きれいに刈り込まれた芝生が敷きつめられ、家族連れのピクニック客がバトミントンなんかを楽しんでいる。芝生に寝転んで得意のお昼寝。まどろみながら、あまりにもあたりまえの日常に埋没してしまい、バリにいることを忘れてしまいそうになる。

ホテルへ帰り、シャワーを浴びてからディナーへ行く。渡辺は明日帰国しなければならないので、今夜がとりあえず最後の晩餐。前日、必死になって予約した「ムルニズ・ワルン」のスモーク・ダックである。

一匹丸ごと、口に入れればとろけるまで柔らかく蒸



しあげたダックを薫製にしたもの。手間がかかるので前日予約が必要だ。かみしめると、ほのかなスモークの香りが広がる。薫製といえばコチコチなものを想像しがちだが、バリのダックはソフトでジューシー肉汁が広がる。

ああ、こんなにウマイものを食うのもひさしぶりだ。付属のダック・スープは直接飲むには濃厚すぎるので、メシにぶちかけて食うことに。これがまた下品で最高にうまいんだ。バリに行くことがあったら、面倒がらずに前日予約してみてね。渡辺バリ最後の晚餐、無事終了す。(一郎)

■ 1997年5月2日

今日は早起き。一郎は今日帰るので荷物整理等があるため、早起きなのだ。7:30にプリング・ブレックファスト、ブリーズ。昨日は30分ほど待たないといけなかったの、今日はベッドから起きてすぐ頼み、30分の間にシャワーを浴びよう、というつもりだったが、早朝のためか、あっ、という間に来てしまう。着替えている部屋の外のテラスにボーイさんが朝食を用意してくれている、という構図は、あまりにも退廃的なリゾートバカンスじみて恥ずかしい。

朝食。バナナジュース、フルーツサラダ、トマトチーズオムレツ、バナナパンケーキにトースト、コーヒーのフル・ブレックファストである。朝日を受けて、輝く朝食をテラスで食べる度に、このホテルの良さを実感する。いろいろホテルを見て回ったけど、このチャンプアンのテラスでの朝食にかなうものはない。9月のバリ再訪時は、やっぱりこのチャンプアンに泊まることにしよう。

荷物詰め。桂子は明日買い物 Day なので、荷物が増える予定だし、まだ必要な洗面道具などは桂子の分担。それ以外の、今まで買ったお土産や、桂子のパンツなど可能な限り託すと、一郎のスーツケースは死にそうに重くなってしまう。ごめんなあ。

今日の予定は、バリの温泉イエパネスへ。10時お迎え。イエパネスの予約の電話を入れてくれたAPA?のニョマンさんが(手数料等払っていない。全くの好意で電話をしてくれたのダ)、ちゃんと送迎が来ているかどうか、わざわざ確認しに来てくれる。カンゲキ! 9月の再会を誓って別れる。約1時間のドライブ。

し・か・し…。イエパネスがっかり。お湯、スパはまあまあ。でもプールは使用不能であった。スパとランチのためだけに $\$48 \times 2 + 21\% = 13,000$ 円も払えるか!! 私たちはプールとスパで半日ゆっくりするためにこれだけ投資したのであって、スパだけで半日過ごしたら、ゆでダコになってしまうやんけ!

プールが使えなかったことに腹を立てているのではない。そのことを事前に説明しないまでか、シャーシャーとプール代を含んだ料金を前金で徴収したデタ

ラメさにキレてしまったのだ。夫婦会議の結果、お金を返させよう、ということにした。桂子がまずぐちゃぐちゃの単語を並べ立てて、とりあえず怒りの姿勢を表現し、次に一郎がそれよりはうんとまともな英語でフォロー。

結果はスパ利用の $\$30 \times 2$ は泣くとして、 $\$18 \times 2 + 21\%$ の約4800円返金でカタをつけた。すぐぐめんどくさいし、疲れたけど、日本人はハイハイお金を払うものさ、と思われたくないし、イヤなことはイヤ!という態度を表現したかったのだ。

しかし、ここのスタッフは予約の段階で、なぜプールの使用不能を教えてくれなかったのだろうか。しかも予約してくれたのはAPA?のニョマンさんなのだ。同じバリ人どおし、言葉が通じないわけではないのに。このズルさはバリらしくないなあ。きっとタイのサムイ島のにわか観光業者のように、観光客の扱いに慣れていないんだ…。という結論。当然昼食もキャンセル。今、すぐここから立ち去りたいゆえ、車を出してください!

13:15、ホテルチャンプアン着。一郎の空港までのトランスポート依頼。そしてホテルのレストランでランチ。一郎はバリ最後のランチなので張り込む。アスパラガスとコーンのスープ、チキンチャンプアン・スペシャル、チャプチャイ・スペシャル、ごはん、ピントンビールスモール、アボガドジュース。アボガドジュース以外はみなおいしい。特にチキンはフランス料理のカツレット風で美味であった。

部屋に帰るなり、一郎は寝てしまう。え〜っ! プールに行こうよお、と思う桂子。ま、ランチの後のシiestaなんて、これこそバカンスなのですけれど。30分くらいで起こす。最後にウォルター・シュピースがデザインしたというプールで泳ぐ。だ円型であり広くないので縁に沿ってゆっくり泳いでいるとコイになったような気分。一郎は「養魚場プール」と名づけていた。

日が陰ってきて寒いので、もう一ヶ所のプールへ行く。欧米人、日本人のカップルが組ずつ先客。ビーチチェアに寝そべっている日本人カップルの横に「オジャマしまあ〜す」と行く。大阪からきた人で、9日までいるそうだ。いいなあ。しかし! プールサイドで「社会福祉のなんたら」などという、いかにもテキスト然とした本は読まないでほしい!

私たちは、そんな本を読んでいる時間はないので、プールで泳いだり、じゃれたり。ここのプールは景色もいいし、水の循環もよくて気持ちいい。

気持ちよく、泳ぐ。15:40、プールから上がる。一郎、旅行の最後の最後に、シュピースが昔、この場所に居た、という跡を見つける。建物の基盤に、碑がレリーフしてあったのだ。このレリーフの1941年という記述が悲しい。当時オランダ領のバリではドイツ国籍のシュピースは敵国人。しかもバリ人から人望も厚いのを総督府の役人から危険視され、結局本国へ強制送還されてしまう。インド沖で彼の乗った船は友軍の日本機から攻

撃を受け、沈没してしまう。バリの素晴らしさを世界に伝え、バリの芸術を高めていったひとつの才能が海へと沈んでいったのだった。1941年のことだ、と感傷に沈む時間はもうないようだ。あわててシャワーを浴び、先に部屋を出た一郎を追いかけ、ロビーへ。間に合う。よかった。

トランスポートの兄ちゃんは、わけわかんねえ人で、まず、桂子も一緒にいくのかと何回もたずねる。さらに支払いは明日でOK、と一旦は言っておきながら、やっぱり今払え、と言う。\$25、ルピーでは60,000という。え〜、違うんじゃない？と言っても、らちあかないのでフロントに行ったら、姉ちゃんも同じことを言う。47,000ルピーじゃないの？と言うと、やっとそれでOK。人見て値段言うんじゃない？一郎には最後の最後にイヤな思いをさせてかわいそおだったなあ、ってかんじ。出発した車に手を振る。

コテージに帰って、水着の洗濯。さて、まだ4時過ぎだ。このままホテルの部屋で夜になるのを待つ、ってのも前向きじゃないなあ、と、ガイドブックを見ると、ウブド王宮でサダ・ブダヤのパロンダンスがあるではないか！ホテル付近は暗いし、今夜は一人で出かけたりしないで部屋にいる方がいいよ、と一郎は言っていたしそのつもりだったけど、今日4時に出来上がっているはずのハレオムのシャツの受け取りと、このダンスにいこう！と決めて準備する。

蚊取り線香を付けていこう、と思いきや、一郎がライターを持って帰ってしまっ、火がないではないか……。……。一郎が帰ってしまうと、私は蚊取り線香を付けることもできないのね、と思うと、今夜一晩、ここで一人で過ごすことがとてつもなく不安に思えてくる。と、外で声がかして、欧米人の50代位のカップルの姿が見えた。慌てて蚊取り線香を持って外に走り出し、「マッチはありませんか？」と聞く。

「今はないけど…。部屋にあるからバンブー2まで取りおいでよ」と笑って言ってくれる。おじちゃんが部屋に取りに行ってくれている間に、入口でおばちゃんと立ち話。「今までどうしてたの？ハウスボーイは気がきかないのねえ」とぶつぶつ言ってくれる。ハウスボーイ君の名誉のために誤解を解かねばと「いえ、ダンナが今日日本に帰ってしまっ、持って帰っちゃったんです」と言う（言ったつもり）。と、おじちゃんがマッチと、線香立てと蚊取り線香（箱ごと）を私の手に持たせてくれて「さあ、これをこうしてやるんだよ（と実演付き）。持っていきなさい」と言う。「いえ、これはあるんです」と箱と線香立てを返そうとしても「いーから、いーから」という雰囲気。好意に甘えて頂く。かくして我が部屋には2箱の蚊取り線香と、3つの線香立てがあることになる。ハウスボーイ君、びっくりするだろうなあ。

けれど、このちょっとしたできごとで自信が湧いてきて、喜び勇んで出かける。いつもホテルの前でたむ

ろしているトランスポートおじさん達がいなくて、道路でしばらく立って待っていると、反対車線をいく車が「トランスポート？」と声をかけてくれた。ハレオムの名刺を見せて「知ってる？」と聞くと、「知らないけど、住所がわかるから行ったらわかると思う」と前向きな答えが好印象だ（時々いるんだ。こんなトコわかるか！ってなげやりなタイドの人が）。

「いくら？」「10,000Rp」「げーっ、プライスダウンしてよ」「あなたの値段は、いくら？」「そうやなー、1000Rpかな。…で、4000Rpで成立。ま、いいでしょ。が、ここにもラッキーが。明日帰る、という話をすると、35,000Rpで空港まで送ってくれると言う。さっき一郎の送迎では60,000だ、47,000だとモメていたのにレベルが全然違うでないの。これはラッキー、と即決する。「4:00、ロビー、35,000Rp」とメモに書いて、名前はワヤンと確認して別れる。あまりの安さにカンドーして値切るの忘れてたけど、この値段なら充分だと思う。

ハレオム、シャツ受け取り。あいかわらず、すばらしい出来栄え。ウブド王宮までジャランジャラン。レートのいい店で両替。一郎に教えてもらった『再生紙ノートの卸問屋風雑然とした店』に行く。ノートだけでなく、ココナツの殻を使ったスプーンやフォーク等もある。そして…初めてバリに来た時に買って、それ以来見つからなかったお気に入りの石鹸置きがあるではないのー!! 不思議な軽さの陶器製で、もうだいたいおちち欠けたりして、買い替えたいと思っていたのダ。それがなんと4000Rp。かんどーっ。

また、細長い箱にドライフラワーがあしらってあって、オシャレな空き箱かなあと思っていると、中にお香が入っていて、ドライフラワーの中にお香立てが仕込んであった、とシャレたもの、これが5000Rp。再生紙のレターセットも2000Rp。もう、何か泣けてくる程安い。ノートは見かけはカッコいいのだが、やっぱり使いにくそうなのでやめる。あとココナツの殻で作ったスプーン大・中を買う。紙袋も。大満足。

ウブド王宮にてサダ・ブダヤのパロンダンス&クリスダンス。サダ・ブダヤは去年もそうだったのだが、舞台のそでで子どもが見ている。パロンダンスの猿役がそれを威嚇し、子ども達にげていく様子がおもしろい。でも、舞台のそでで、役者の内輪の子どもが見ている、というのはいかに素人くさく、プロ集団という雰囲気には欠けてしまうと思う。しかし、パロンはかわいかった。

お気に入りのプラダ・カフェでディナー。靴脱ぎのウダウダシートがつまっていたので（といっても相変わらず空いているが）いす席へ。「ナシ・チャンプルーはある？」と聞くと「ないけど、これ、同じようなもの」と指さすメニューはバリ・スペシャル・シーフードなんとかで、なんと13,800！ウブドでのシーフードはミロズで懲りているし、13,800はあまりにも高い。kakuなら4回以上食べられる金額である。かといつて最後

のディナーにスパゲッティやピザではあんまりだし、インドネシアでわかるメニューはカレーやナシゴレンくらいだし…。ま、最後のぜいたく、と思い、それとソト・アヤムとミックス・ジュースを頼む。

ミックス・ジュースはバリにしてはめずらしくあっさりめ。ソト・アヤムは期待にたがわず美味しい。で、一緒に出してくれたフランスパンがベリーゲー。ぎゅっと中身がつまっていて噛み締めるほどに味があって。これでサンドイッチを作ったらさぞかしおいしいうなあ、という味。

で、バリ・シーフード・スペシャル。足付きのカッコイとお皿に乗っかって登場。すごいおいしそう。よく見れば両隣のテーブルの人もこれを頼んでいて、オススメのメニューのようだ。しかし、足つき皿なので食べにくい。いすに乗っかって、リキいれて写真撮る。うまく写ってればいいなあ。あまり遅くなるのもナンなので、デザートはパスして帰る。

支払いのとき、美しいお姉さんが「美味しかった？ また来てね」「実は2回目なんだよ。去年の9月にも来たの」。なんともうれしそう。カンジいい店だし、おいしいのでなんではやらへんのかなあ。…高いからだ。そうだった。

また、スーパーに寄って帰る。石鹸はみんな行き先が決まってしまったので、自分用の石鹸を5ヶ、自然食レストランを経営している友人に粉のスパイスのつらなり(4000Rp)、会社の友人にピンタンを約束していたのを思い出し、缶のピンタン(3000Rp)を買う。

スーパーを出ると「ハイ！チャンプアンホテル！」と声をかけてくる。えっ？と振り返ると、知った顔がニコニコしている。「？…ワヤン？」「Yes！」。トランスポートの予約をしたワヤンだった。「今から帰るの？ ホテルまで3000でどう？」抱えた買い物を見せながら、「いっぱい買ったからお金がないの。じゃらんじゃらんして帰るわ。明日またよろしくね。」と笑って別れる。暗くて、人通りの少ない道を歩きながら、3000で150円だよな。150円ケチってなにか事故にあったらチャレにならへんよなあ、と思う。ホント、使うところにはお金を使うってこと、咄嗟の判断で「OK、それのった！」というのがヘタなんだよなあ、と反省す。

全身を緊張させて、やっとホテルへ到着。あー疲れた。ホテルのくねった道をひとりりで歩くことや、暗い部屋に一人で入ることが怖いやらなあと思っていただけ、案外怖くない。夜、外出し、とりあえず無事に帰ってこれたことで、自分の身は自分で守れる、大丈夫という、度胸がついたようだ。

シャワーを浴びて、こずかい帳つけて、ベッドの中でウダウダ紅茶とお菓子しながら日記つけ。この「自分だけのペースで動ける心地よさ」が一郎の言っていたやつなんだなあ。(桂子)

桂子もやっと高貴なワタシのお言葉が理解できるようになったのね。(一郎)

いつもなら「歯を磨けよ！」と一郎に怒られるのだが、今晩はこのままウダウダ寝る寝る寝る寝る寝る。

あ、生理はじまる。これでお寺とプールに入れなくなっちゃうなあ。(プールとお寺、同じレベルで考えることかい！)(桂子)

■ 1997年5月3日

7:30AM 目覚める。生理中でおなかが痛い。起きてゴハン食べて鎮痛剤を飲まなきゃ、と思いながらも身体が動かない。え、え〜い、と起きる。シャワー。

朝食を待っている間に日記つけ。いつものハウスボーイさんにチェックアウトタイムをたずねられ、「4時」と告げる。う〜、今日帰るんだと実感させられる。「兄さん、お名前は？」「スウラ」「スウラさん、今日まで毎日ありがとうね…」と10,000Rpのチップを渡す。

と、昨日一郎を空港まで送って行ったタクシーの兄ちゃんがやってきて、「あなたの夫は渡辺か？」「そうだ」「夫に頼まれた。今日4時にあなたを空港に送って行く」と言う。残念ながら35,000Rpでワヤンちゃんに頼んであるので、「ごめん、自分でもう手配したのでいい。」「手配は自分でしたのか、旅行社でしたのか？」めんどうなので「旅行社でした」と言うと、「昨日旅行社から電話がかかってきて、私が行くように言われた。」え〜、だってあんたさっき、渡辺から頼まれた、って言ったやんか！でもとてもそんなこと英語で言えないので、「ごめん、私、英語、わかりません。トランスポートは自分で手配したのでいいです。」と、会話を打ち切る。この兄ちゃん、このホテルのトラブル・メーカーやな。鼻毛の兄ちゃん、要注意ってとこかな。

鎮痛剤が効いてきた。ショッピングへGO！ホテルにたむろしている白タクの兄ちゃんたちに、ポリスオフィスの近くのスーパーまで、と伝える。相も変わらず、先方は10,000Rpからスタート。ダメもとでとりあえず言ってみる、ってやつかね。ねぎって4,000Rpで。乗れば乗ったで、「今日の予定は何だ、帰日も送ろうか、エアポートまでトランスポートするぞ、etc.」えーい！うるさーい！ほっとけー！（タイミンクのいいときにはありがたいクセに。わがままな奴）

スーパー。ローズ・ウォーター、はじめてのジャスミン・トニック、ベビーせっけん。ジャムは聞いてみるもヤセ用はない、との事。

ダラダラ歩きながら、去年見つけて気にいっているパン屋バリ・ブッダへ。5種類のパン、ぜんぶ2個ずつテイク・アウトで、と言うと驚かれる。「だってエナなんだもん。」と言うと、笑ってうなずく。このパンは冷凍しておいて、忘れたところに暖めて食べると、バリが味わえてまたいいのだ。これも昨年買って、毎朝のコーンフレックのお供によかったミックス・ドライフルーツとナッツ。それぞれ3袋買う。しめて、26,500Rp。うー、うれしい。

ここにもマッサージ OIL が売っているが 20,000Rp。OIL はどこでも高くなったもんだねえ。これなら日本で買うのと変わらない、という感じ。地元の人にしたら、超高いだろうに。バリ・ブダを出て、ガネーシャブックショップへ。何も買わず。一郎の言う「紙卸問屋」に再度行く。正確な店の名前はわからず。表に「ハンドメイドグッズ&リサイクルペーパーグッズ」とあるのみ（伊藤さん、ぜひ極通で取材して、詳しく載せてください！）。昨日のスプーン・フォークセット 10 セット、そして迷いに迷ってよくレストランでテーブルに置いてあるロウソク立てを買う。これさえあれば、京都でバリ式ディナーができるぞ。

疲れ果ててムンブルズへ。ナシチャンプルーとパイナップル&ココナッツジュース。このジュースが死ぬ程うまい。これが 2,000Rp。泣けてくるなあ。おいしいジュースを飲むたびに、昔ウブドで出会った埼玉のケチなねーちゃんを思い出す。貧乏旅の必要性はわかるけど、節約するあまりにレストランで水だけのんで帰ろうとしていたっけ。私は絶対、そんなのやだ。そこで一番おいしいものを食べて帰りたい。そのために働いているのだからねえ。ココナッツアイスクリームがバグース。バリではじめて美味しいアイスクリームにあたった。

もうそろそろ出ようかな、と思っている所へ、隣のテーブルの日本人の女の人に声をかけられる。彼女も一人のようだ。仕事でインドネシアに来て、今はウブドで休暇を楽しんでいる、とのこと。もうちょっとしたら帰るんだけど、オモシロイお土産でも売っているイイ店知らない？と聞いてみる。ちょうど帰りかけにあるお店を教えてくれる。私は先程の「紙卸問屋」を、買ったものを見せびらかしながら教えてあげる。聞いてみると、何と彼女もチャンプアンに泊まっているのだそーだ。気をつけていい旅をねー、と言って別れる。

彼女に教えてもらった店を覗きながら、JL ウブドをチャンプアン方面へ歩く。お土産はいまひとついいものに当たらない。バリ 4 回目だもんなあ、もう目新しさがなくなのかな、と思いながら、ホテルのちょっと手前の店にコーラでも飲もうと入る。瓶にストローを指して、店先で座り込んで飲む。店先に釣り下げた布を何気なく見ていると、これはどうだ、あれはどうだ、と勧められる。いやいやもう、と断りながら、目の端に入ったイカット。

イカットは大別すれば 2 種類あって、昔の草木染めで手織りで、そのモチーフも宗教的な色彩が強い伝統的なものと、化学染料で染め、機械織りのものに分かれる。もちろん化学染料の染めは草木染めの深い味わいにかなうはずもないのだが、伝統的なものは当然値段もむちゃくちゃ高いし（前回 7 万円と言われ、きっぱりとあきらめた）、何より宗教儀式を描いたものは、よくわからない模様が実は生首だったりするので、いまひとつ買う気にならないので R。

で、その店で見つけたイカット。聞いてはいたけど実物は始めて見た『伝統的イカットを再現したイカット』。ま、イミテーションですな。店の人は「ロンボク島のオリジナルイカット」って言うけど、オリジナルがこんなにきれいで、こんなに安い訳ないじゃん。54cm × 120cm で 10,000Rp(500 円)。私にはこれで充分ですわ。もちろん生首は避けて、馬の模様ものを買って買う。積年の夢かなったり！最後にいいものが買えてうれしー！

ホテルでシャワー、荷物の整理をしていると、スウラさんがバイバイを言いに来てくれる。彼は交代で、今から休みのようだ。いろいろどうもありがとー。夕方の風に吹かれながら、テラスで最後の日記つけ。出発の 15 分前にロビーに向かう。ロビー前の駐車場のすみにはワヤンがいて、私を見つけると小さく手を上げて合図をしてくれた。ほかのタクシーの運転手はロビーでただただ TV を見てるというのに、もぐりのタクシーだからロビーまでは入ってこれられないのかな。そういう暗黙のルールがあるのだろう。

さて最後の難関、チェックアウトだ。カードで払う、と言うと何だかややこしい計算をしていて、詳しく説明をせよと、1 泊 \$54 なのだが、それをルピアに換算して請求するらしい。で、カード会社からの請求はドルに換算されてくるので、換算する度に少しずつ割高になっているのだ。今度からは、日本から必要な金額のドルを持っていくのが一番賢いようだ。

私がカウンターで戦っている横では、あの鼻毛の兄ちゃんがぴったり張り付いて待っている。私が終わると、さあ行こうという合図。「私はあなたにオーダーしていません！」と強く言い放ち、ワヤンの方へ向かう。私まで、最後にあいつに不愉快にさせられたぜ。

ワヤンの車は軽快に飛ばし、後ろ髪引かれる私の気持を無視するかのようにあつという間に空港に着いてしまった。「またバリに来て下さい」と言われ、「もちろん！」と言って握手して別れる。じゃ、また 9 月に、と思いながら、慣れた空港の中にひとり入っていった。（桂子）



旅人一声・番外編

川島 優子

ジャカルタでの暴動の後、周囲の反対を押し切って私は日本を発った。

飛行機はジャカルタ経由デンパサール行き。機内はもちろん空港も閑散としていた。

私は空港で友達に迎えられウブドに向かった。1時間でウブドに到着。

おなかの空いた私達はバイクに3人乗りで“CAFE APA KABAR”に行った。

キンキンに冷えた ANKAR BIR で乾杯！そして、待ちに待ったインドネシア料理の定番ナシゴレンを食べた。最高に美味しかった。

朝早く目を覚ました私はマンディをすませ、パサール(市場)へ向かった。パサールには、色とりどりの果物やお菓子、おいしそうな Nasi Campur が所狭しと並べてあった。まさに庶民の台所といった感じだ。

私はマンゴスチンを5つ買って食べた。めちゃくちゃ甘くて美味しかった。

私はインドネシア語の勉強のために BALI POST (新聞)を買った。BALI POST を脇に抱えているとインドネシア語で話しかけられてしまいちょっと困った。私はひたすら新聞を指して「Nanti berajar!」と言って笑って逃げた。しばらくひとりであたりを歩いた。ふと、足を止めて入ったカセット屋のお兄ちゃんと仲良くなった。私がバリの正装が欲しいというと、それならスカワティのパサールに連れていってくれるという。私たちはバイクに二人乗りでスカワティまで30分走った。そこは、布の宝庫だった。何種類もの布の中から私はブルーのサロンに白のクバヤ、黄色のスレندانを選んだ。

夜には初めてのワヤンクリッを見に行った。物語はバリ語だったので内容は理解できなかったが、ゆらゆら揺れる炎の中で繰り上げられる影絵芝居にじっと見入っていた。時々、英語で笑わせてくれるような場面もあっておもしろかった。終わってから舞台裏を覗いてみた。所狭しに人形とガムランが置いてあった。しかも、そんな狭いところに男の人が数人座っていた。すごい光景だった。

二日目の朝は、パサールで Nasi bungkus(2000Rp)を買って食べた。もちろん手で。手で食べることに慣れていない私はひとりでぼろぼろこぼしてしまい、恥づかしかった…。

私は、友達のスズキ・ジムニーに乗り込みバリヒンズー教の総本山、プサキ寺院に向かった。

昨日買ったばかりの正装でバッチリきめこんだ。1時間ほどでプサキ寺院に到着した。そのスケールの大きさに驚かされた。よく晴れた青い空に凜々とそびえていた。私たちは広い境内をそろそろ歩き、上へ上へと登った。プサキ寺院からの眺めもまた素晴らしかった。

そして、私たちは初めてお祈りをした。聖水をかけてもらい聖米を額につけた。身も心も洗われるような気がした。

私たちはその後キンタマーニに向かった。キンタマーニから見下ろすパトゥール湖は、まさに絶景だった。絵葉書のようなその景色に私は、感動を覚えた。

この日は、友達の誕生日だったので私たちは夕方からバースデイパーティを予定していた。泊っているコテージの庭にごさを敷いて照明を外に運びだし、持ち寄った酒とお菓子、それからメインのケーキを並べた。予定の時間になるとどこからともなく友人が集り20人ほどがごさに肩を寄せ合うように座った。

そして、万国共通?の「Happy birthday!」の歌を歌い、パーティーは始まった。

バリの Arak (酒) を飲んだ。カーッと喉が熱くなった。薄暗い庭で私たちの笑い声だけがどこまでも広がった。インドネシア語と日本語が飛び交う中で私は、みんなと仲良くなった。

3日目、私は仲良くなったカセット屋のお兄ちゃんとふたりでバイクにまたがりアメッドに向かった。アメッドまでの道のりはとても長かった。ゴアラワ・パダンバイ・チャンディダサ・ティルタガンガを通り走ること3時間。バイクで風を切って走るのは本当に気持ちよかった。ライステラスの広がる山道をバイクで飛ばした。アグン山も迫力があつた。途中、川でマンディする子供たちやマンディする牛を見かけた。

アメッドに着くと、私たちはシュノーケリングのセットを持って海に行った。アメッドの海は、波も穏やかで透明度も高くほんの少し潜るだけでも色とりどりの魚を見ることができた。でも、少し泳ぐだけで足が届かない深さになってしまうので、少しこわかった。近くにいたお兄さんが丸太を貸してくれたので私は、その丸太につかまりながら夢中で魚を追いかけた。泳いだ後は、ビーチ脇のレストランで彼のおすすめスペシャルナシゴレンをたらふく食べた。そして、アメッドにある彼の家に連れていってもらった。彼の家族に歓迎され、おじいちゃんにはヤシの実をとってもらった。目の前でヤシの実を割り汁を飲ませてくれた。初めて飲むヤシの実の汁は、言葉も出ないくらいおいしかった。汁を飲んだ後は、ヤシの実をパカッと二つに割り、中の実を食べさせてくれた。実は真っ白でつるんとしていた。宿に戻ると私は急いでマンディして正装に着替えペジェンのオダランに行った。寺院に着くと正装した子供たちがたくさん集っていた。カメラを向けると子供たちは集ってきて跳びはねて喜んだ。シャイで無邪気なバリの子供たちは、本当にかわいかった。私たちはその後、kenang-kenang (ほたる) を見にライステラスへ行った。小さな緑色の光が暗闇にひらひら揺れていた。私はほたるを見るのも初めてだった。なんとも幻想的な世界に酔いしれた。

4日目私はウブドを離れレギャンに移動した。私が以前から文通していた彼と再会した。満月のこの日はあちこちでオダランがあるということで私たちは、デンパサールのオダランに行った。ものすごい数の人でごった返していた。さすがに満月の夜ということだけあって騒がしかった。私はバリ人に紛れ込んでお祈りした。バリ人になりきって…。3回目のお祈りということもあって今回は、手際よくお祈りすることができた。レギャンに来てからは、毎日、朝早く起きて海でボディボードをしていた。日本に帰る前日の夜、私はその彼にジンバラに食事に連れていってもらった。そこは、魚を量り売りして

いて自分の選んだ魚をその場で焼いてくれるという所だった。私たちは目の前に広がる海を眺めながらその魚を食べた。香ばしいにおいがしてとても美味しかった。波の音だけが聞こえる素敵なひとときだった。けれども、海の方こうに見えるングラライ空港の明かりが私を寂しく、切ない気持ちにさせた。私は明日日本に帰らなければならない…。このまま、時間が止まってしまえばいいのと思った。波の音を聞きながら私はバリでの楽しかった毎日を思い出していた。翌日、彼は私を空港まで送ってくれた。彼が最後に片言の日本語で言った「ユウコ、ホントニ、ニホン、カエル…」のひと言が私の頭にこだまする。とてもつまらなかった…。私はこらえていた涙があふれだしてしまった。「アトデ、ナク…イマ、ダメ、アトデ、ナク、サヤモアトデ、ナク…」そう彼は言った。私はもう彼の顔をまともに見られなくなっていた。時間は無情にも刻々と過ぎていく。私は、まともにさよならを言えないまま、目を腫らして飛行機に乗り込んだ。そして、バリを発った。小さくなってゆくバリを見ながら私は声を殺して泣いた。楽しかった旅は終わった。毎日毎日がキラキラしていて本当に楽しい9日間の旅だった。こんなに素敵な旅にしてくれたみんなにありがとうを言いたい。私の心からBALIが離れることはないだろう。

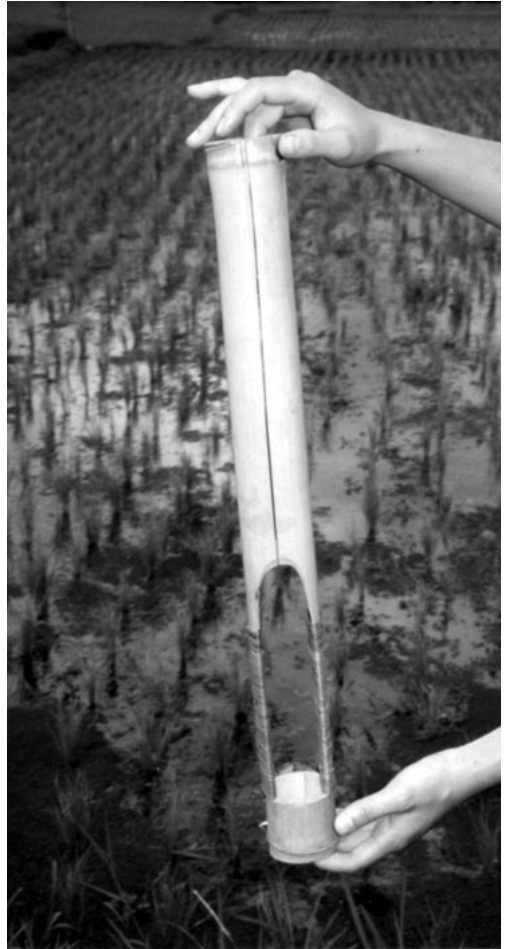


これ なあ〜んだ?

Apa itu?

問題： この竹筒は何のために、どのように使う物でしょうか？

ヒント： もうすっかり田んぼの稲が黄金色に色づき、穂が重たげに垂れ下り始めました。青空の下、気持ちよく畦道を散歩していると、突然、女性が大きな声を張り上げているのが聞こえました。たいていのことに驚かない私も、女性が大声で叫んでいるのを見てははっとおろけにはいきません。ブラック・マジックにでもかけられたのか？ はたまた、旦那の浮気現場を発見してしまって気が触れてしまったのか？ いったい何があったのか、何故そんな奇声を張り上げているのか、心配だけど何だかちょっと恐いような気もしてきます。しばらく立ち止まって様子を見てみると、女性はあるひとつの状況になると大声を上げるのに気がつきました。・・・なあ〜んだそうだったのか。それにしてもたいへんな仕事だな、なんて感心してしまいました。そうなんです、なんと女性は大声を上げて穂をつつきに来るスズメを追っ払っていたのです。日本の田んぼには昔からのカカシがありますが、どこの国もスズメ追いには苦勞するものなのですね。大声を張り上げる以外に、バリではいったいどんな方法をとっているのでしょうか…？



解答： そうです、この竹筒は、スズメを追い払う道具のひとつなのです。名称は地域によって違いますが、UBUD 近辺では「テケテケカン」といいます。おもしろい名前ですね。これは「テケテケ」という音を出すからなのだそうです。写真の物は 50cm ほどのものですが、ジェゴグのような巨大な竹筒を使うこともあるそう。使用方法は、ふたつ割りにした竹筒の切り込んだ部分に手を入れて持ち、振ることで音を出すのですが、筒先を指で摘んで振る方が大きな音が出るのです。その時、ちょっと気を緩めると指を挟まれることがよくあるので気をつけましょう。といってもわれわれツーリストが使うことはまずありえないので気をつける必要もないか。指を挟まれない方法は、指の変わりに棒を差し込んで振るのだそうです。巨大な竹の場合は、その棒の先に紐を付けて遠くから振るそうです。でも今ではこの“竹筒鳥追い機”も骨董化し博物館で飾られるようになってしまいました。ついでに説明しておくと、バリにも日本と同じような一本足のカカシがあります。そして最近では、紐にたくさんのビニールをぶらさげて、それが自然の風ではためくことになって、スズメ追いになっています。これは、買物の時にもらう白黒ストライプのビニール袋が利用されているので、一見ヒモにゴミがひっかかっているようにしか見えません。美しいライス・テラスにはちょっと不釣り合いな鳥追いだな、なんて思ってしまう。大声で叫ぶ方法は今でもよく見かけますが、他に何かよい方法はないのでしょうか？ 知っている人、どなたか教えて下さい。

※写真はタバナンにあるスバック博物館で撮ったものです。

私の常宿

Pondok Manis

Putra Bali Nihon

三上 英男

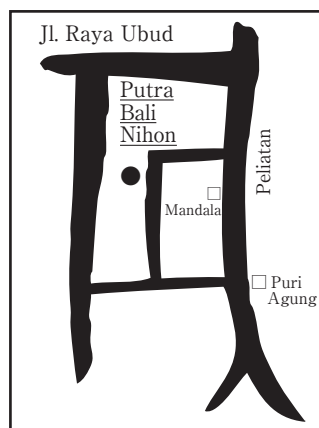


芸能の村として有名なプリアタン村、マンダラ・パンガローにほど近い所にあるこの宿は、まだオープンしたばかり。僕は、第一号の客でした。夜遅くに着いたにもかかわらずウェルカム・ティー（日本茶）でもてなしてくれました。朝食には、フルーツと卵、パンといった、普通のロスメン・スタイルの食事だけでなく、ナシ・チャンプルやチャーハンなどもでて、旅行者を飽きさせない工夫がこなされています。

オーナーのバグースさんは日本語が上手で、色々、案内もしてくれます。奥さんの照子さんは日本人で、とても暖かく接してくれ、慣れない外国で疲れた心と身体にとってありがたい心づかいをしてくれます。梅干しを出してくれた時は、本当に嬉しかった。

とても静かなロケーションにあり、ゆっくりとくつろぎたい人にはオススメ。バグースさん・照子さんファミリーの家に、ホームステイしているかのような、アットホームな雰囲気あふれる宿です。

なにしろオープンしたばかり、これからの成長を僕も楽しみにしています。



住所：Br. Teruna, Peliatan

Ubud, 80571 - Bali

TEL / FAX : 62-361-977211

旅人一声 Pesan & Kesan

Fumio

半年間という月日を終えて、私は又日本へ帰る。帰るだけの事。私の中にBALIと日本を分けるものはもう少なくなった。日本に居るのがつらいとかBALIだから楽しいとか、そんな言葉を口にする事さえ少なくなった。来る度に私が変わってくのだろう。

今回のBALIでの生活で一番辛んだ気がするの「続けていく」という事。何回か来てみて初めてパサールでチャナン（供物）を買って、自室だけだがスンバヤンを試してみた。日に2回。（できない日もあったが）朝7～8時に起き、パサールに行く。同じ店で毎日買う。

ある日チャナンを買う私を見た他のお客さんが「この日本人はナンデ宗教が違うのに買ってるんだ」とお店のイブに聞いていた。そこですかさずイブが「でもこの子は毎朝毎朝来るんだよ」と言ってくれた。たったそれだけの言葉がとても私を嬉しくしてくれた。ここに続ける事の幸せがあった。

毎日毎日と同じようにBiasa-Biasaで暮らすBALIの人々が私はとてもうらやましく思った。私もそうなりたく願っていた。でも願っているだけでは何も先に進まないし、何かを続けてゆかなくては願いはかなわない。バカみたいに当たり前の事だが本当にそう気づいた。私は本当にあきっぱい人間で人が疲れるくらいあきっぱい。その私が2つだけ続けてきているのが絵を描く事とBALIに来る事だ。BALIにいて絵を描いてるナンテ極上の幸せ！ 恋人ができるよりも嬉しい！

これからの私の為に続けていく事の大切さを教えてくれたBALIに感謝。そして感謝を心からできる気持ちにさせてくれた神様にありがとうを。（毎日のスンバヤンのおかげでしょうか）毎日がありがとうの日々だったBALI。この気持ちは日本でも続くことでしょう。

最後にここで知り合えた全ての愛しいみんなへ。又、逢いましょう。そしてBALIの神様と私の神様が対立しませんように。 Selamat.

その他のニュース



■アート・フェスティバル開会

今年のPKB（パー・カー・ベ）＝アート・フェスティバルが去る7月14日に終了しました。例年に比べると、恒例のオープニング・パレードが無かったり、芸能も含めた催物が少なかったりとちょっと淋しいPKBでした。これはやはりクリス・ムステールの影響なのでしょうか、色刷りのスケジュール・パンフレットもほんのごく一部にしか配布されず、（紙代、印刷代が以前の3～5倍になったのです）市民にとってもまいち盛り上がり欠けたようです。とはいえ、フェスティバル・ゴン・クビヤルだけはいつものように盛況でした。今年のギアニヤール代表チームはバトゥブラン、バンジャール・デンジャランの面々。おなじみエナちゃんのダンナもクندان奏者として参加しました。今年のテーマは、新作舞踊に「ウエルカム・ダンス」、センドラタリ（舞踊劇）に「レアック＝ブラック・マジック」というユニークなもの。ギアニヤールチームの実行委員会には、かの有名なニョマン・ウィンダ氏、クトゥットウ・タモ氏、クトゥットウ・チャタル氏、イブ・チャンドリなど、ギアニヤールの誇るそうそうたるセニマンが名をつらねました。踊り手では新作ウエルカム・ダンスにあのユリアティちゃんとお姉ちゃん、センドラタリにマデ・ジマツト氏の妹さん（迫真の演技に拍手！）なども参

加し、それはそれはすばらしい出来栄え。こりゃあ今年の優勝はいただき！！と思いきや、PKB閉会と同時に発表されたのは、異例の「4県同時優勝」。それはデンパサール市、バドゥン県、カラングッサム県、そしてギアニヤール県でした。審査員は「どの県も甲乙つけがたい。しかし本番での出来がいちばんよかったのはギアニヤール県である。」とコメントを発表。エナちゃんのダンナは「じゃあどうしてギアニヤールが一番じゃないんだよー！！」と悔しがることしきりの、今年のフェスティバルでした。

■在留届でハラがたったゾ！

「TAKA-Chang、まだ在留届出してないよね？」ある日突然、極通スタッフからこう聞かれた。在留届!?…外国に3ヵ月以上滞在する人は、居住先をその国の日本大使館または日本領事館に届けでることになっているのだそう。きちんと在留届を出している極通スタッフのもとにも、最近のインドネシアの情勢に際し、デンパサールの駐在官事務所から何度も「お知らせ」が届いており、そこに“知人に在留届を出していない方が居られるときは提出するようお願い下さい”とある。なるほど、イザという時に連絡先が不明だと困るもんね…。それに日本で海外転出届なるものを出してきた私は、このままでは住所不定。これではいかんだろう…と思い、在留届を提出することにした。いざ、デンパサールの駐在官事務所へ！

場所が分かるかどうか不安ではあったが、日本の国旗がはためいていたのですぐに分かる。受付で在留届を出したいと言うと、1枚の紙を渡された。名前や住所、本籍、滞在目的などを書く欄がある。ん？

滞在目的かあ。…少々悩む。ビジネスじゃないし、観光でもないし…。BALIのこともっと勉強したいってことかな、ガムラン習ったり、踊り習ったり、言葉や文化も…。う～ん、ま、修学かあ、と思いき、修学の欄にしるしをつけた。その他色々記入し、受付に提出すると、「少々お待ち下さい」と言われる。あれ？ これで終わりじゃないんだ。何だろう。在留証明とかくれるのかなあ…と待つこと30分。やけに時間かかるなあ、早く帰りたい…でもここは

うぶっなトク その27 ほりッ

BALI だし…と思い始めた頃、やっとおおびがかかった。返事をし、窓口へ向かう。すると、日本人の女性が一言「修学が目的なら、所属先も書いて下さい」と、こちらの顔も見ずに冷たく言い放ち、書類を返してきた。ちょっと待ったあ、それはないでしょう。30分も待って、これですか？ここはBALIだし…なんておとなしく待っていたのがバカらしくなってきた。私は別に悪いことはしていないはずだ。なんか叱られてしまった気分。在留届を出しにきたのですよ。迷惑かけに来たわけじゃ、ありません。真面目に考えて修学の欄に印をつけたのが間違いだったのでしょか？それにしても修学先って？「STSI」とか「ウダヤナ」とか？ 私の場合、「マデさんの家」とか「クトゥットさん家」とか？ それより、「なぜBALIに居るのか」まで報告する義務があるの？在留届だもの、住んでいる場所と連絡先だけでもオッケーなんじゃない？ あ～あ、マジメに考えたのが間違いだった。すっかりヤル気をなくして、観光の欄に印をつけかえる。受付のバリ人の女の人に「もう帰ってもいいですか？」と聞くと、にこやかに「はい、引っ越したらまた来て下さいね」と言ってくれた。先程の日本人女性の対応に少々（かなり？）頭にきていた私は、笑顔を返す余裕もなく、事務所を後にした。久しぶりに興奮してしまいました、ごめんなさい、受付の人。

…なぜ、在留届を出しにきてこんなに不愉快な思いをしなくてはならないのだろう…。もしも書類の書き方を間違っていたのなら、普通に説明してくれたらいいのにな…。考えているうちに、怒りを通りこして悲しくなってきたTAKA-Changなのでした。



【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。おろかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。



お知らせ

「うぶっぴな人々」でもご紹介したとうり、アンカサのコテツさんが
去る7月27日にめでたく結婚しました。「Angkasa」は、

UBUDの王宮・プリサレンから少し北に入ったところにあるカフェで、そのおしゃん
な雰囲気や手づくりコーヒーのおいしさで日本の雑誌にもよく紹介されています。
極通の読者の方の中にも、もう「おなじみ」の人も多いです。

ところで肝心のコテツさんのお相手ですが、えんがんと、カテッちゃんとい
うとても可愛いバリニーズ・ガール!! (「や、や、やてーコテツ!!」の声。)

カテッちゃんは アンカサのオープン当時の従業員のひとりで、「いつから、
いったい、そーゆーふうにな?」という極通スタッフの立ち上げた「質問に、
「ハハハ、つい最近ですよ」と答えてくれたコテツさん。…という

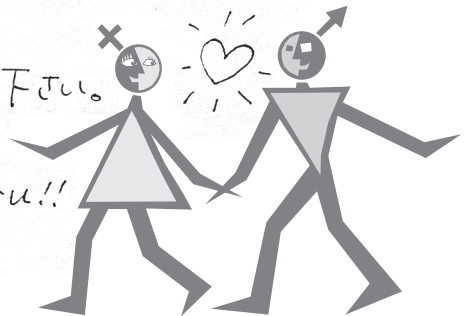
ことは、電撃結婚!! 先日のウパチャラは、マヌキ村のとある「プダング」
のお宅で、シンプルで、でもいちばん基本の大切な結婚の儀式
でしたが、招待客を多勢招いての結婚式及びレセプションは、
9月28日に予定されているそうです。

皆さんどんどんお祝いにかけてあげて下さい。

コテツさん、カテッちゃん、

Selamat menumpuh hidup baru!!

幸せになっネ!!

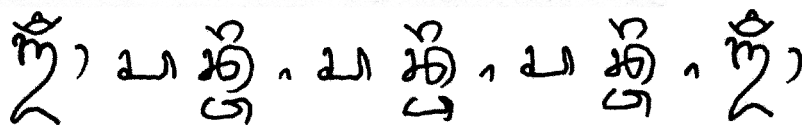


Pengumuman

アムゴンばん

— 貧乏な、あ、まちがえた! 貧乏な 極通スタッフより —

今まで UBUDで、極通のためにカッコな使用に耐えてきた
ワープロ2台のうち、1台がとうとう原因不明の故障に●おちいて
しまいました。しかも、プリンターがついている方の、大事なヤツが……。
もし、プリンターつきの、「もう使わないよ」というワープロがあったら
ゆずっていただけませんか。ルピア生活者は とても新品が買えません。



お、願います。
連絡は
極通本部まで。



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / 中田 恵

桑野貴子 / 堀祐一 / 菅原恵利子

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：伊藤博史

カバー：水野真人

極楽通信「UBUD」Vol. 27

1998年8月10日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)973134

©1998 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)973134
- 日本連絡先 〒 143 東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302
ポトマック株式会社内, tel.03(5743)7100 fax.03(5743)7101